

た新型登場」の呪縛にがんじがらめになっている。一流の研究者達が自らの研究結果がA (H1N1)2009が新型ではないことを証明していても、呪縛が解けていないかあるいは何らかの理由によりそのふりをしているところが面白い。

e. いたちの話

2009年12月24日 新型ワクチン「季節性」併用で効果増強 海外チーム 小児も1回で効果と報道された。内容は「フェレットでの実験の結果、新型ワクチンの4週間前に季節性ワクチンを接種した場合と、新型のみ1回接種、季節性のみ2回接種の効果を比較した。新型ウイルスに感染させたところ、新型のみよりも、季節性を先に打った群で予防効果が高かった。抗体価は季節性の後に新型を接種した群では十分に上昇した」というものである。これは、A (H1N1)2009と今シーズンの<3価ワクチン>のA (H1N1)であるA/Brisbane/59/2007との間に共通の抗原決定基が存在することを示している。奇妙な記事であり、この記事の内容からは、新型インフルエンザの予防には、季節性インフルエンザワクチンを1回やってしかる後に新型インフルエンザワクチンを1回やるのがよいという誤解が生じる。第一にこの研究はフェレット(いたち科)の話であって、フェレットへの接種実験をそのまま人間に当てはめることはできない。フェレットはインフルエンザウイルスに感染した時の症状は人間のインフルエンザそっくりである。しかし、インフルエンザの自然の宿主ではないので、人のようにインフルエンザに対する既存の免疫がない。そこで、フェレットに季節性インフルエンザワクチンを接種して、既存の免疫(pre-existing immunity)のある状態にするというのがこの研究の本来の主旨であろうと思った。そこで、原典を参照した²⁰⁾。「過去の感染の既往あるいは過去の季節性インフルエンザワクチンによるPrimingが新型インフルエンザワクチンに必要な否かを知るために、フェレットに季節性インフルエンザワクチンを接種してから新型インフルエンザワクチンを接種した。季節性インフルエンザワクチンのみではA (H1N1)2009に対してfunctional antibodyができなかったが、季節性インフルエンザワクチンはimmunological primingをフェレットに与

え、A (H1N1)2009<単価ワクチン>1回接種でprotective antibodiesの生成を見た。以下省略」というものであった。結局、季節性インフルエンザワクチンを接種して免疫を付与しておいたフェレット(すなわち、人と同様に既存の免疫がある状態を人工的に作ったフェレット)に新型インフルエンザワクチンを1回接種すると満足すべき免疫反応が起こる、すなわち人では新型インフルエンザワクチンの接種は1回でよいということである。共著者のDr. Albert Osterhausについては後述、Dr. Rino RappuoliはNovartis Vaccines and Diagnostics, Incの主任研究者。

f. 不活化インフルエンザHAワクチン<3価ワクチン>に対するワクチン接種前後のHI抗体価(筆者らの成績)

A (H1N1)は毎年流行している亜型であり、ワクチン接種は追加免疫効果を期待して接種するものである。1回の接種で十分な抗体反応があり、2回目を接種しても抗体は最早上昇しない。筆者らは学童(就学前小児、3歳から6歳を含む)、成人(施設職員)、高齢者(施設入所者)の3群を対象として、不活化インフルエンザHAワクチン<3価ワクチン>に対するワクチン接種前後のHI抗体価を2シーズンにわたって測定した。図5にそのうちの1つを引用する²¹⁾。2000/2001シーズン、ワクチンを1回接種しただけで、高齢者では、平均抗体価(2ⁿ)が接種前 -0.27、接種後2.58で2.85の上昇(7.2倍)になった。成人では、平均抗体価(2ⁿ)が接種前 0.71、接種後3.07で2.36の上昇(5.1倍)学童では平均抗体価(2ⁿ)が接種前 1.41、接種後4.34で2.93の上昇(7.6倍)。従って、3群すべて1回のワクチン接種に対して、極めて高い抗体反応を示した。同様に、A (H1N1)2009<単価ワクチン>も乳児(3歳未満)を除いて接種回数は1回で十分である。12月16日「新型インフルエンザワクチンの接種回数について、中学、高校にあたる13~18歳は原則1回とすることを決めた。1回でも十分な免疫効果を得られることが分かったため。13歳未満は引き続き2回接種とする。同省は今後、免疫効果の持続期間などを調査する。」と報道された。最初か